

## 「フリオ・ゴンサレス」展 ピカソに教えた鉄彫刻 溶接が生む立体世界

ピカソに鉄の溶接技術を教え、「20世紀鉄彫刻の父」と呼ばれたスペインの彫刻家、フリオ・ゴンサレス（1876～1942年）の日本初の回顧展が、東京の世田谷美術館で開催されている。約100点の展示作品からは彫刻の新たな地平が見えてくる。

ゴンサレスの鉄彫刻は概して抽象的だ。「鏡の前の頭部」は、細工のない細い胴体に、鏡を思わせる円形の面を組み合わせたシンプルな造形。頂上部に付けられた細い鉄棒は髪の毛を連想させユーモラスだ。「座る女I」は、湾曲してへこんだ腹と広げた手が特徴。無駄が省かれ、ある意味で物の本質を残した形といえる。細い鉄棒や鉄線が溶接によって接合され、空間に解き放たれた造形は自由を謳歌しているようだ。抽象彫刻といえば冷たく見えがちだが、「土臭く温かみがある」と本展を担当した塚田美紀主任学芸員。

ゴンサレスは金工職人を父にスペイン・バルセロナで生まれた。父親の工房で職人として経験を積み、1899年からパリに移住。画家を目指しながら工芸職人として活動した。本展に展示された「花（菊）」のような植物をモチーフにした作品を制作。建築の装飾や室内の置物などに使われ、もてはやされた。

その後、ガス溶接技術を学び、パリで交流のあった同じスペイン出身のパブロ・ピカソ（1881～1973年）に溶接技術を教えた。ピカソはその技術を生かして「人物（アポリネールの記念碑のためのプロジェクト）」や「庭の女」など、有機的で解放感のある鉄彫刻を制作した。

ゴンサレス自身、ピカソに教えたことで50歳を過ぎてから彫刻に目覚めた。彫刻家としての活動期間はわずか10年あまりだったが、絵の中の線のように自在に空間へと伸びた作品は「空間の中のドロイング」と呼ばれ注目を集めた。塚田さんは「ピカソは彫刻のイメージを紙に描けても、立体にする技術はなかった。ガス溶接の技術を持ったゴンサレスが教えたからこそ可能になった」と話す。

ゴンサレスはブロンズや石の彫刻ではできない細い線状の表現を可能とし、鉄彫刻の新時代を築いた。「20世紀鉄彫刻の父」といわれるゆえんで、ピカソのみならず、英国の彫刻家、アンソニー・カロ（1924～2013年）ら後の現代彫刻家に多大な影響を与えた。

晩年は、スペイン内戦、第二次大戦と続いた戦乱が彼の作品に大きな影を落とした。溶接用のガスや資材が不足して思うように制作ができないまま、終戦を待たずにパリ郊外の自宅で亡くなった。「戦後まで生きていればもっと有名になっていたのでは」と塚田さんは話している。

「スペインの彫刻家フリオ・ゴンサレス・ピカソに鉄彫刻を教えた男」展は来年1月31日まで。12月28日～1月4日と月曜休。一般1000円。問い合わせはハローダイヤル（電）03・5777・8600。

渋谷和彦



「鏡の前の頭部」1934年頃 バレンシア現代美術館蔵 (C) IVAM, Institut Valencia d'Art Modern